ん。他者との交流では、対面して目と目が合うこと、互いに表情を読むことが必須です。つまり、他者理解を促すためには、双方が対面した状況を介助者が作らねばなりません。それだけではなく、二人が同時に同じものに対して注意を向けることができねばなりません。そのため、ものの位置に即して二人の顔の向きを変えることも必要になります。これを怠れば、知的発達の機会を奪うことになりかねません。このように知育園では、知育素材ごとに子どもたちの居場所・姿勢を変えることが求められます。大変なことですが、他者理解の進歩を促し、これを知的発達につなげるためには必要なことです。こうした労を惜しまず、小児の知育活動は行っていく所存です。

横地分類

「移動機能」、「知的発達」、「特記事項」の３項目で分類し、以下のように表記する。

例：A1−C，B2，D2−U，B5−B，C4−D

〈知的発達〉

E6	E5	E4	E3	E2	E1	簡単な計算可
D6	D5	D4	D3	D2	D1	簡単な文字・数字の理解可
C6	C5	C4	C3	C2	C1	簡単な色・数の理解可
B6	B5	B4	B3	B2	B1	簡単な言語理解可
A6	A5	A4	A3	A2	A1	言語理解不可
戸外歩行可	室内歩行可	室内移動可	座位保持可	寝返り可	寝返り不可	

〈移動機能〉

＜特記事項＞
C：有意な眼瞼運動なし
B：盲
D：難聴
U：両上肢機能全廃
TLS：完全閉じ込め状態

うららの日常活動

竹内　円

Dさん（横地分類A1）は、ドミノを並べたり、積み木を積んだりする動きをよく見ていて、手を伸ばして一緒に行うことがあります。直径1.5㎝ほどの色とりどりの木製のビーズが入った箱を職員が持っていくと中を覗くように見ていました。木製ビーズの中心には小さな穴が空いています。まずは、職員がヒモにその木製ビーズをゆっくり通しました。Dさんは職員と、職員が通した木製ビーズの動きを見つめています。職員が木製ビーズを箱から取りだしDさんに見せると、Dさんはつまむようにして手にとり、職員が持っているヒモに通そうとビーズを近づけました。木製ビーズがうまく穴に通ると、ヒモに通った木製ビーズと、職員を見て表情を緩ませすぐに箱に手を伸ばしていました。木製ビーズがヒモに通ったことで、次もやりたいという気持ちになったようでした。また、木製ビーズを取ってヒモに通そうとしましたが、次はヒモに通ることなく床に落ちました。落ちたことにハッとして眉が上がり、落ちたビーズをつまみながら、「んー」と小さく唸るような声を出していました。ヒモに通らなかったあとからは、それまでよりも集中した様子で

木製ビーズとヒモを見つめていました。職員が、Dさんに見えるように穴を指差しながら示すと、Dさんは指したところを見たあとゆっくりヒモに近づけていきます。近づけたと思うとまた穴をみて確認する姿は真剣な表情で、慎重になっているようでした。木製ビーズがヒモを通ると緊張感が解けたように、職員を見て口元が少し緩んでいました。そのあとは、木製ビーズがうまくつかめなかったり、ヒモに通り損なって転がるビーズを見たりすると吹き出しそうな笑顔になっていました。でもいざヒモに通そうとするときには、指でつまんだ小さな木製ビーズの向きを変えるために指先にまで意識を集中させてヒモに通していました。成功するとできたときの手応えを感じているようでした。

Dさんは、形や色の広がりが大きく変化するところに気が付きそれをよく見ます。『ふしぎなナイフ』という本を使い、前のページから変化がはっきりしているページに限定しながら絵を見ました。ページ全体に1本のナイフが描かれているところから始まり、ページをめくるとナイフの刃先がバラバラに散らばったり、さらに長くなったりします。最初はなんとなく見ているような様子でしたが、長いナイフからページをめくると急に短い小さなナイフになるところでは、変化に気が付いたようでハッとしていました。短くなったナイフがまた戻った後に、ナイフの刃先が膨らんで大きくなったところでは、職員を見て表情がゆるみ、より面白さを感じて見ているようでした。